横浜市小学校社会科研究会

５学年部会

研修会記録

第　７　号

令和６年　１２月　４日

横浜市小学校教育研究会
会長　　沼田　留美子
横浜市小学校社会科研究会
会長　　髙畠　聡
同　学年部長　　田澤　哲哉

【提案日時】
１２月　４日（水）

【会　場】
横浜市立　西富岡小学校
駒岡小学校

【西富岡小　会場】

授業者	金井　伸一　先生	（西富岡小）
司会	大橋亜矢子　先生	（　元街小）
記録	宮崎　智明　先生	（　杉田小）

【駒岡小　会場】

授業者	能登　清仁　先生	（　駒岡小）
司会	藤原　佳澄　先生	（新鶴見小）
記録	平間　洸舗　先生	（　桜台小）

【授業者　金井　伸一　先生（西富岡小）】

１　単元名

「公害とむきあって　～四日市の人々からのメッセージ～」

２　自評

・全小社からずっと、聞き合いを大切にしてきた。子ども達のよさが十分に出た授業であった。
・抽出児Aさん、面白い思考をするがどのように伝えたらいいか分からない。その部分を支援してきた。本時では、思考が変わらないかと思っていたが変わった。
・全体に資料提示後の動きは未知数であった。よって、子ども達に委ねる部分が多かった。
・流れがまだ動いていたので、ふり返りはせずには話し合いを続けた。

３　協議会

《質疑応答》

・資料の選定について
多くあるが、必要に応じて使う。資料提示すると自然と使う。授業者が指をさせば自然にさすようになる。
・単元の時間配分について
単元によって軽重をつけている。
・学習問題がなぜ変わったのか
児童が納得していない様子だったので、確認してから変えた。
・社会変革についての捉え

裁判結果による変革は、経済→環境（一般的）でも、「変わってないじゃん」二項対立ではない。変わる中でも難しさや複雑さ、単純ではないこと。変わったと言われていたが、変わっていないと思われる部分もあることを捉えて欲しかった。

・資料提示のタイミングについて
授業者が決めると出すタイミングを逃す恐れがあった。事前に決めてはなかったが、感覚で出した。

・次回の学習問題について
ふり返りを見てから、児童とコンセンサスをとってから学習問題をつくる

・本時の学習問題の成立過程について
　児童の矛盾はあったのか。全体としてどのように成立したのか。世の中はどう反応していたのかを考えるために新聞記事を資料提示した。企業や四日市が変わったならわかる。社会が変わったのか、社会が変わるってどういうことかを子どもが考えることで学習問題が成立した。一般的には変わったと言われているが、注目児のA児は変わったとは思えない。とふり返りに書いていた。

《グループ討議》

・子どもたちだけで話し合いが進んでいた。自分の考えを自分の言葉で伝える姿、子どもが子どもに投げかける姿が終始見られた。
・個を見取っているからこそ、資料を提示するタイミングが絶妙で児童が必要な部分だけを抽出してあった。
・学習問題を全員が理解しており、話題が逸れたときに子どもが学習問題に立ち返る姿が見られた。自分たちの問いになっているので、自分ごととして捉えられていた。４月からの積み重ねを感じた。
・既習事項を生かしており、資料を根拠に理由を話している姿が見られた。国・企業・当事者と視点を明確にして話し合っていた。
・フリートークが、自分の思いを自由に話せ、友達の発言を価値づけできる場となっていいた。

４．指導講評

【日枝小学校校長　加藤　智敏先生】

・記録が追いつかないほど児童に発言力があり素晴らしい。心理的安全性があり、話し合いたいと思う雰囲気作り、苦手だけど言いたい児童を大切にしている様子が学級の中に見られた。心理的安全性をさらに高めていくためにも自分の意見に対して異論が出ても大丈夫だ、相手の意見も大切なのだからと子ども自身が感じられる場面を繰り返し経験することが大切である。
・授業者の一人一人の児童を生かす支援（問い返し）が随所に見られた。
・学習問題、文言の精選、言葉ひとつ一つを大切にして言う姿から、児童が問いを大切にしていることが分かる。
・本時では振り返りをしていなかったが、振り返りすることで児童の思考が深まる、学びが

深められる。一人でじっくり考える時間をとることが大切。
・資料：年表と地図がつながって考えられている。5年生の後半のこの時期に大切な力。地図や年表は、6年生に向けて地理的、歴史的な見方や考え方を働かせていく上で欠かせない。また、資料は必要なものが整理されたものにしていくこと、限られた時数の中で思考を深めていくためにもシャープにしていくことが大切。
・単元づくり：そこにあるジレンマについて考える経験を選択判断の場で得ていく。例えば経済を発展させると環境問題が発生する。そのものの解決は難しい。これまでどのように人々がそのジレンマについて考えてきたのか、関わってきたのかを考えたい。行動すれば簡単に答えが出るような問いではなく、皆で考えること、自身でも考え続けていけないと思えるような問いであってほしい。ジレンマについて考え続けることで社会的事象の本質に迫れる。「自分は何をするか」ではなく「（判断に迷う）自分はどうしていくとよいのだろうか。今の自分はこうしたい。」と考えられる児童を育てたい。

【教育課程推進室　主任指導主事　森　圭一朗先生】
・授業研究会は他県ではなかなか見られない横浜市の強み。
・子どもたちが熱意をもって学習に参加している姿がとてもよい。
・大前提として「聞く」を大切にする、対話は聞くことがあって始めて成立する。金井級の児童は話している子を見て、何かしらの反応を返すことを意識していた。友だちが何を言いたいのか、わかろうとする姿勢を育てている。
・問題意識を生むためにはズレ（ギャップ）が必要。ズレがあるから対話が生まれ、考えの違いを楽しむことができる（同じ意見を理解するだけでなく、違う意見も知ろうとする姿）ズレは大きく３つある。
　① 事実と事実のズレ
　② 事実と児童の自分の生活経験や学習経験とのズレ
　③ 児童同士の思考のズレ
・教師はできるだけ出ないことを目指す。教師の代わりに児童が語る。それでも教師が出るタイミングはある。話合いの流れの修正箇所にこそ、教師の出番がある。
・資料提示のタイミング。児童の見取りがあるから感覚はついてくる。授業力は、児童の反応を予測する事前のシミュレーション力がものをいう。
・参会のみなさんが心に響いた本時の児童の言葉を思い返し、ご自身の学級に返すとよい。
・新しい過ちが起きた時に、被害を最少限にするのがこれからの自分たちが考えることなんだと子どもたちが気付いていた。
・選択・判断の場面で育てたい姿は、「安易な行動化ではなく、意味のある意識化。」自分たちにできることを考え続けることが大切。様々なジレンマがあるこの世の中で、自分たちには何ができるのか考え続けることが大切なんだと気付く児童を育てる。
・簡単に納得しない児童を育てる。

【授業者　能登　清仁　先生（駒岡小）】

１　単元名

「森林とともに生きる　～「きまつり」から考える木づかい運動～」

２　自評

〇視点１①

森林単元は奥が深く、森林組合のSさんと協力して教材研究を続けてきた。小田原の木を使って作られたコップとプラスチックのコップを比較するという事前の検討とは異なる導入にはなったが、身近なものから考えることで問いを生み出せるのではないかと考えて始めた。結果的に子どもたちが興味をもって学習を始めることができた。結果的に導入を変えてよかったと思っている。（直感で選ぶ子どもや理由をもって選ぶ子ども、また選んだが作り方までは知らない子どもなど様々な姿が見られた。）自分たちから知りたいという思いが強まり、見通しをもって学習に取り組めたことは視点１としては大きな成果と言える。また、Sさんの内容だけではなく、国土についても触れないといけないため、林野庁のきづかい運動やウッドチェンジなどについても授業で触れるようにした。

〇視点１②

今回の振り返りは必ずノートでまとめるようにした。（ノートは木からできているということもあるが）子どもたちがイラストを使うなど、自由にまとめたり、見返したりすることができるようにすることで、何回も最初に立ち返ることや木の良さについて改めて気づくなど、自分の考えをより深めることができた。

〇視点２

見えないものを見える化することは難しかった。イベントを行うことの本当の意味を考えてほしいという思いで、今回チャレンジをしてみた。最後の振り返りの時間の時に発言量は少なくなくなってしまったが、子どもたちが振り返りを書く時間が足りないと言ってくるほど、集中して自分の考えを書くことができた。振り返りを積み重ねたり、一生懸命社会的事象に迫ったりすることで、自分の考えを深めることができ、よい沈黙だったと思う。Sさんも一生懸命協力してくれた。横浜市から車で１時間くらいの距離なので、これからも協力してくれるとのことだった。

３　協議会

《質疑応答》

Q 最初に出された資料「５０人から５００人の変化」の内訳や変化の具合などを教えてほしい。

A 佐藤さんの話では、だいたいの人数しかわからない。（正確に人数を把握しているわけではない）

Q きまつりの趣旨や内容について何人の子が予想を話してくれていたことがいたと思う

が、他の子どもたちは抑えられていたのか。
A 動画などを通して内容や様子は抑えられている人は多かったと思う。前単元である情報についての予想に引っ張られている人も多く、そうゆうものかなとも思っていた。

Q 見えないところを見えるようにすると話していたが、先生が一番大切にしている部分はどこだったのか。
A Sさんとかかわることで、林業の課題や思い、イベントを開く本質は何かなどを抑えたかった。（林業の仲間を増やしたいという思いとイベントを開く意味を結び付けて考えさせたかった）

Q Sさんはきまつりの目的をどのようにとらえているのか。
A きまつりとは、川上・川中・川下の人たちが一緒に運営することで、木の一連の流れがどのようになっているか知ってほしいという思いがあった。イベントを通して林業にかかわる人を増やしていきたい。

Q きまつりの動画は、子どもたちは見ていたのか。
A なかなか小田原に行くことは難しいので、共有ノートに動画をいつでも見られるようにし、イメージを持てるようにした。

Q 川上・川中・川下という分類は出店している店舗のことなのか。
A 出店しているものを事前に分類しておけばよかったが、子供たちは川の流れに例えて、川上・川中・川下に分けていることは出前授業で学習していた。資料で出てきた出店数の変化は、出店している人たちが川上・川中・川下のどこに属しているかで分けた。例えばテントサウナは、川上の人が運営している。

Q 学習問題の５０人から５００人という資料は最終的に消えてしまったが、社会科研究会の考え方としてそれでもよいのか。
A 今回はきまつりの目的を考えさせたかったが、子どもたちの言葉を使って考えると今回のような学習問題になった。今回はもっとよい学習問題の言葉があったかもしれない。
⇒以前の指導案に書かれていた「きまつりは森林を守ることとどのようにつながっていたのだろうか」の方が適切だったのではないか。
⇒子供たちにとっては難しい問いだったのかなと思っていた。

Q ５番の子はどんな子なのか。注目児のA児の２２番とは対照的な子に見えたがどんな関係性なのか。
A 普段は寝ている子だが、先生のために頑張ると話していた。よいつぶやきもたくさんしていた。２２番の子とはグループは違う。

《グループ討議》
〇本時目標についてきまつりの価値は抑えられていた、一方で林業が抱える課題にもう少し子どもたちが触れられるとよかった。（具体的な課題と関連付けながら意見を言える）林業にかかわる人だけではなく、自分たちが木を使うことやきまつりに参加することも「仲間」の第一歩であるということに気付けるとなおよかった。

〇Ｓさんの話をよく聞くことで、より深い考えをまとめることができた。きまつりを行った前後で人数が変わったことに理由があったことは、子どもたちは理解できた。子どもたちが、自分たちができることはどんなことがあるかや具体的にどんな変化があったのかを見てわかる資料が必要であった。

今回の授業の山場は？
子どもたちのつぶやきの中に「人によってちがう」や「楽しかったら行く」、「興味がないといかないけどね」などの言葉があった。実際に体験をした子供たちは体験してみて学びがあったとも話していた。自分たちも仲間の一人であることや行動を起こしていくきっかけを考えられるとよかった。

４．指導講評
【國學院大學人間開発学部　初等教育学科　教授　小笠原　優子先生】
・最近は木に代わってきているものが多い。日本は杉が余っているが上手に使えていない。子どもたちが木を使う良さに気付いていけるとよい。
・授業の導入であるコップを比べる活動はとてもよかった。最後のまとめの時に大きな変化があると思う。
・視点①については子どもが自ら問いを見出し、主体的に学び続けることができる単元づくりということで、問題意識を大切にしながら授業づくりを行っていた。先生が求めていた子どもたちの姿をどのように達成していくかを考えていかないといけない。
・視点②については、子どもたちが本当に話したくなるような問いや活動を取り入れていくとよい。また、社会科として事実や事象を子どもたちがとらえてよさや意味を考えていけるとよい。
・林業の課題は、たくさんある（人の数が減少しているなど）。授業で学んだことや問題を結び付けて考えていけるとよい。例えば森林の面積は世界でもトップクラスだが、木材は輸入に頼っている。それはなぜなのかを考えさせていかないといけない。
・小田原に実際に行ってみた。紅葉がきれいで自然が豊か、遠足で来ている人もたくさんいた。森林が手入れされていることが分かる。実際に行ってみたことで木の良さを改めて感じた。木の良さと日本を知ったうえで世界とのつながりを見ていけるとよい。
・仲間とは、ボランティアなど、林業以外にも木に何かしらの形でかかわることも仲間の一員であるという認識をもてるとよい。
・森や木のよさを実感できるような教材研究ができるとよい。
・川上・川中・川下の人たちの思いや体験した子どもたちの話をもう少し掘り下げられるとよかった。でもそれらをつないでくれたのは、Ｓさんだったということ。

【鎌倉女子大学教育学部教育学科　准教授　大塚　俊明先生】
・先月Ｓさんと初めてお会いした。横浜市ではＳさんに協力をお願いしている先生が多いと感じた。

・森林の体積が増えていて、木を切ることが森林を守ることにつながる。子どもたちの認識としては木を切ってはいけないという認識が多いので、そこを生かしたずれを使って学んでいけるとよい。
・５番の子がとても頑張っていた。普段寝ている子が先生のために頑張れることは素晴らしいこと。一方で２２番の子は逆に教科書的で的確な表現をしていた。でも２２番の子にも揺さぶりをかけていくことも重要であると思う。
・子どもたちの今回の授業のこだわりはどこだったのかが気になった。先生の問いについては一生懸命答えようとしていたが、子どもたちの本当の疑問や思いが分からなかった。
・なぜ？という問いは納得いかないという言葉とセットでないといけない。なので、今回の学習問題よりも前回のきまつりと森林を守ることはどのようなつながりがあるだろうかの方が、問題性があった。
・今日の中心資料はグラフであったが、あのグラフを見せる意味があったのか、見せるのであればもう少し吟味をする必要があったのではないか。
・子どもたちの思いを引き出せるとよい。「同じ」と言っている子が多かったが、本当に同じと思っている人はどのくらいいるのだろうか。
・振り返りが大切である。常に振り返りを行う必要がある。今回であれば板書をうまく活用し、思考の流れをたどらせるとよかった。もう一回見てみようという声掛けがあってもよかった。
・早稲田大学教授が、振り返りの発表の時に手を止めさせなくてもよいと話していた。振り返りをやりながらでも頭に入る人もいる（エビデンスはないが）。試してみても面白い。
・社会科は何かしらのこだわりをもってほしい。社会科は主体的な学びと切っても切り離せない教科である。ラーニングコンパス２０３０で提唱されている国際的な標準学力は、エージェンシー（行為主体性）が求められている。自ら学び・常に振り返り・責任をもった行動に移していくことが重要とされている。社会科は探求という原点を生かすことができる存在であるため、こだわりを大切にしてほしい。
・学習過程は主体的・対話的で深い学びやＰＤＣＡなどが大事といわれているが、ＡＡＲも大切といわれている。Ａ（アンティシペーション：見通し）・Ａ（アクション：行動）・Ｒ（リフレクション：振り返り）。見通しをもってどのように学んでいくのかということ、振り返りをしていくことが大切である。

文責　宮崎　智明　先生（杉田小）、平間　洸舗　先生（桜台小）